

La Comédiathèque

隔離

ジャン＝ピエール・マルティネス



comediatheque.net

著者および上演権

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲は、無料でお読みいただき、ダウンロードすることができます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。また、上演には所定の著作権使用料が発生する場合があります。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演許可を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

隔離

Jean-Pierre Martinez

ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

互いに面識のない四人が、なぜか隔離される。そこは、使われなくなった劇場らしい。想像上のガラスの向こうから、人々（観客）が彼らを見つめている。感染者とみなされた四人は戸惑う。いったいどんなウイルスに感染したというのか。何が起きるのか。いつ、どうやって終わるのか。やがてここが「ビッグ・ブラザー」に支配された近未来であり、この隔離の理由が必ずしも医学的なものではないことが少しずつ明らかになっていく。

登場人物：

ドム

パット

マックス

サム／キム

性別は基本的に問わない。全登場人物に、ユニセックスで、どこか画一的な印象を持たせる。上演中に俳優が役を交代してもよく、それぞれの役は衣裳で示す（青・ピンク・緑などの患者用ガウン、白い医療スタッフ風の上着、黒い立ち襟の制服）。この版では、ドムとマックスを男性、パットとサム／キムを女性としている。

© La Comédiathèque

第一幕

舞台上は、一脚か二脚の椅子を除いて何もなくてもよい。ドムが、おぼつかない足取りで入ってくる。病院の患者が着るようなガウン（青、ピンク、緑など）を着ている。訝しげに辺りを見回し、やがて観客の存在に気づいて驚く。不安そうに近づき、客席を観察する。その背後から、同じ格好をしたパットが入ってくる。

パット – こんにちは。

驚いたドムはびくっとして振り向き、パットに気づく。

ドム – びっくりした……。

パット – ごめんなさい……。じゃあ、あなたも……？

ドム – ええ……。

気まずい間。

パット – どこかで会いましたよね？

ドム – 同じ車両にいたと思います。

パット – 13号車。そうですね！何か関係があるのかしら……。

ドム – 関係？13っていう番号とですか？

パット – 私たち二人がここにいることと！同じ車両だったでしょう……。

ドム – わかりません。というか、そもそもなぜここにいるのか、まったくわからない。

パット – 私もです。何が何だか。列車を降りたら、二人の係官に「ついて来てください」って言われて……。

ドム – 本当に警察だったんですか？

パット – たぶん……。マスクをしてました。あ、仮面じゃなくて……病院でつけるようなマスク。救急車に乗せられて、それで……。

ドム – 救急車？本当に？警察だったなら……。

パット – じゃあ……バン、ということにしておきます。

ドム – 医療仕様の警察車両。

パット – そう、それ……。ここまで連れて来られて……待っているって。あなたは？

ドム – 同じです……。じゃあ、あなたにも何も説明がなかったんですね。

パット – 待て、とだけ。

ドム – それで……ほかには何も聞きませんでした？

パット – いいえ……。 (間) 「カランテーヌ (*quarantaine*) 」……つまり「隔離」という言葉が聞こえたような気がします。

ドム – ああ、そう……？

パット – あなたも聞きました？

ドム – はっきりとは……。

パット – でも、それが一番ありそうじゃないですか？

ドム – カランテーヌ……隔離ね。ほかに何がある？

パット – マスクの説明もつきます。

ドム – そうですね……。で、これからどうする？

パット – 待つ……。そう言われたんでしょう？ 待ってて。

間。

ドム – カランテーヌか……。もともと「四十日」から来た言葉らしいけど……本当に四十日も続くなら、その前に少しくらい説明してほしいな。

パット – 名前の由来が四十日だからって……必ず四十日続くわけじゃありません。病気次第です。

ドム – 病気だと思います？

パット – ほかに何が？ 隔離されてるんですよ……。

ドム – そうか……。ウイルスだろうな。

パット – かなり感染力が強いんでしょうね。

ドム – でしょうね……。

パット – 私は何の症状もないけど、あなたは？

ドム – 私も何も。

パット – でも……症状がないから感染してないとは限りません。潜伏期間がありますから。

ドム – 医者なんですか？

パット – 情報処理員です。

ドム – 情報処理員？

パット – 昔はIT技術者って呼んだらしいです。

ドム – なるほど……。じゃあ、ウイルスにも詳しい……。

パット – それより、子どもが三人いるので……。あなたは？

ドム – 子どもはいません。

パット – いえ、そうじゃなくて……。あなたも医者じゃないんですよね。

ドム – 訓練官です。

パット – 訓練官……。

ドム – 昔は教師と言ったらしいです。明日は……。調教師、とでも呼ばれるのかな。

パット – なるほど……。

ドム – なるほど？ 何がわかったんです？

パット – いえ、その……。ウイルスについては、私よりもっと知らないんだなって……。

間。

ドム – つまり、潜伏期間はウイルスによって違う？

パット – ええ……。感染してから一週間後に最初の症状が出ることもあります。もっと早いことも、遅いことも。

ドム – 医者じゃないわりには……。感染症の広がり方にずいぶん詳しいですね。

パット – 言ったでしょう、子どもが三人いるんです。一人が病気になると、たいてい数日後には残りの二人も同じことになります。

ドム – でも私たちは病気じゃない！

パット – 病気になるずっと前から、人にうつすことだってあります。

ドム – そうですね……。本当にウイルスを持っているなら。

パット – だから隔離されたんでしょう、たぶん……。でも、そのうち説明してくれますよ。

ドム – きっとね……。

マックスが、二人と同じ服装で入ってくる。

ドム – ああ……。狂人が増えれば増えるほど……。

パット – 狂人が増えれば増えるほど？

ドム – 昔の言い回しで……。「狂人が増えるほど、笑いも増える」……。いや、何でもない。

パット – この方なら何か知ってるかもしれません。

かなり混乱した様子のマックスが、客席の方へ進み出る。

ドム – それは期待しないほうがいい。あまり正気には見えない。

パット – こんにちは。

マックス – あ、こんにちは……。私も……。今、着いたところで……。

ドム – どうして私たちも今来たばかりだとわかるんです？

マックス – え？

ドム – 「私も今着いた」と言いましたよね。どうして私たちが今着いたってわかる？ もう何週間もここにいるかもしれないのに……。

マックス – 何週間もいるんですか？

パット – 今来たところです。

マックス – ああ……。じゃあ私と同じだ。ほら、やっぱり。

パット – ええ……。

マックス – で……。どうしてここにいるか、わかってます？

ドム – むしろ、あなたが教えてくれるかと思ってたんですが……。

マックス – 知りませんよ……。列車を降りたところを、何の説明もなく連れて来られた。こっちは暇じゃないんだ。

パット – 私だって……。家では子どもが三人待ってるんです。夫も、まあ一応。あなたは？

マックス – 結婚してません。南のほうまで、入院中の母親を見舞いに行っただけです。

ドム – お母さんも病気なんですか？

マックス – 大腿骨頸部を骨折したんです。

パット – それなら少なくとも、うつりませんね……。

マックス – でも、この損失、誰が補償してくれるんです？ 今週中に終わらせなきゃならない現場が二つあるのに……。

パット – 補償は出るかもしれませんよ。職人さん？

マックス – 配管工です。

ドム – 探してるときには、なかなか見つからないんですよ……。

マックス – 何です？

ドム – いや、何でも……。

パット – 配管工……。聞いたことはあるけど、何をする人だったか、もうよく覚えてません。

ドム – 今は「修理員」って言うんですよ。

パット – ああ、そう……。

ドム – この方は専門修理員。配管やパイプや蛇口を直す。昔で言う配管工です。

マックス – ということですか。

ドム – つまり、あなたもどうしてここに閉じ込められたのか知らない？

パット – 閉じ込められてると思うんですか？

ドム – 閉じ込められていようがいまいが、隔離なら外に出ちゃいけないでしょう？

マックス – じゃあ、ここは隔離施設だと思ってるんですか？

ドム – こちらの専門家によれば、私たちはウイルスを持っていて感染力がある。だから隔離されたんだそうです。

マックス – ウイルス？ 何のウイルス？

パット – それは……未知のウイルスでしょうね。既知のものならワクチンがあるはずだし、わざわざ隔離されないでしょう。

マックス – なるほど……。でも、なぜ俺たちが？ わかるんですか？

パット – 知らないうちに感染者と接触したのかも……。お母さんに会いに病院へ行ったって言いましたよね？

マックス – 骨折ですよ！

パット – ええ……。でも病院なんて、ウイルスだらけでしょう？ よく言うじゃないですか……。

マックス – 今度は俺のせいかな……。

ドム – 落ち着いて。誰もあなたを責めてませんよ。

パット – それに、ここで何週間も一緒に閉じ込められるなら、仲良くしたほうがいいです。

マックス – 何週間もここに置かれると思ってるんですか？

パット – わかりません。今のところ、何もわからない。

間。

マックス – で、あなたは大丈夫？

パット – まあ……。本当ならすぐ家に帰って夫と子どもたちに会いたかったけど……。

マックス – いや、そんなことはどうでもいいんです。つまり……病気っぽい感じはあります？

パット（むっとして） – 今のところはありません。

マックス – あなたは？

ドム – 大丈夫です。でも……健康を気遣ってくれてどうも。

マックス – 俺も……元気そのものです。

ドム – それはよかった、よかった……。みんな安心しましたよ……。

マックスはもう一度、周囲を見回す。

マックス – ここがどこか、わかります？

ドム – いいえ……。ここへ運ばれた霊柩車からは何も見えませんでした。ブラインドが下りていて。

マックス – 霊柩車だったんですか？ 本当に？

ドム – 私、そう言いました？ いや、医療搬送車です、もちろん。

パット – 走ったのはせいぜい十五分くらい。駅からそう遠くはないはず……。

マックス – でも……病院じゃない。

パット – ええ……。今のところ、病人じゃないからかも。

マックス – 変だな……。ここ、いったい何なんだ……。？（舞台を一周し、観客に気づいて顔をこわばらせる）それで、あいつらは誰です？

パット – あいつら？ 誰のこと？

マックス（客席を指して） – あいつらですよ！

パットは目を細めながら前へ出る。

パット – 見えない……。この照明……まぶしすぎて……。

マックス – ほら！ こっちを見てる、あの大勢の人！

パット（客席に気づいて） – 何これ……。？（ドムに）見えてたんですか？

ドム – ええ……。入ってきて最初に気づきました。

パット – 言ってくれてもよかったでしょう！

ドム – 何を？

パット – 見られてるって！ 聞かれてるって！

ドム – すっかり忘れてました……。言ったところで何が変わる？ 私たちは何も悪いことをしていないし、まずいことも言ってないでしょう……。

パット – そうだといいいけど……。

マックス – 俺は何も言ってませんよ。

パット – 悪夢みたい……。

マックス – 向こうには、こっちの声が聞こえてると思います？

ドム – むしろ、そのためにいるんじゃないですか。

マックス – 聞くために？

パット – 少なくとも観察するためでしょう。私たちは「観察中」なんだから。病気がどう進行するか見るために……。

マックス – おかしいな。こっちには向こうの声は聞こえない。

ドム – 誰もしゃべってないからかも。

パット – それか、ガラスの向こうにいますか。

マックス – ガラス？

パット – 取調室みたいなものですよ……。 *（強い照明に目を細めながら）* こうやって光を目に当てられて……。

ドム – 取調室に入ったことは一度もありません。少なくとも今日までは。

パット – でも、わかるでしょう。正しい側にいる人は相手を見られるけど、相手からは見えない。

マックス – 相手？

パット – 容疑者ですよ！

マックス – でも今は、こっちから向こうが見えてる。

ドム – 一つだけ確かなのは、もし私がいつか取調室に入ることがあっても、絶対に「正しい側」にはいないだろうってことです。

マックス – 正しい側……？ どっちです？

ドム – ガラスの正しい側ですよ！ 見られずに見る側……。

マックス – じゃああなたの説だと、取り調べられるのは向こうで……俺たちは見物する側？

パット – 確かに、それはおかしい。私たちは警察じゃないし……。

ドム – あなたがそう言うなら……。

パット – 何ですって？

ドム – 取調室にもずいぶん詳しいんですね……。

パット – 何が言いたいんです？

ドム – 別に……。ウイルスには何でも詳しい。取調室がどんなものかも知ってる。まさか、向こう側の人間じゃないですよ？

パット – 向こう側？ 何のこと……。

マックス – 潜入してるのかもしれない。たぶん、この人が言いたいのはそういうことです。つまりスパイ。

パット – 私はむしろ、みんなだんだんおかしくなってきたんだと思います。あの人たちはきっと医者です。感染の危険を冒さずに、私たちの病状を観察してるんですよ。

マックス – いないものと思えばいい。

ドム – そうしましょう……。何事もないふり。自分たちが実験室のモルモットで、百人もの専門家に昼も夜も監視されながら、何日でどうやって死ぬか観察されてるわけじゃない、と思えば……。

サムが、三人と同じ服装で背後から入ってくる。

サム – こんにちは……。

パット – この方なら何か教えてくれるかも……。こんにちは。お医者さんですか？

サム – 情報提供者です。

パット – 情報提供者？

ドム – 昔は記者って呼んだらしいです。

マックス – ああ……。じゃあ、あなたも俺たちと同じだ。

サム – みなさん情報提供者なんですか？

マックス – いや……そういう意味じゃなくて。俺たちと同じで……どうしてここへ連れて来られたのか知らないんでしょう。

サム – 残念ながら、まったく。列車を降りたところで……。

ドム – はいはい、それはもうわかってます……。

サム – 質問に答えてるんです。知ってるなら、どうして聞くんです？

マックス – 何も知らないって、今言ったばかりでしょう！

サム – そんなに怒鳴らなくても。

マックス – すみません。その通りです。

サム – それで、列車を降りたら……警察にここまで連れて来られました。それ以外は何も。どうして拘束されたのか、まったくわかりません。

ドム – 「拘束する」と言われたんですか？

サム – はっきりとは言われてませんけど……。

パット – 私には「ランテーヌ」って聞こえました。隔離のことだと思ったんですが。

サム – 「ランテーヌ」？ 年齢の「四十代」の話だったりして。

ドム – それじゃ何も進みませんね……。

サム – 留置されてるなら、それなりの理由があるはずです。

ドム – 今度は留置ですか？

サム – 失礼……。 「観察」と言いたかったんです。

パットは少し声を落とし、さりげなく客席を示す。

パット – じゃあ、あそこで私たちを見てる人たちが誰なのかも知らない？

サムは客席に気づくが、驚いた様子を見せない。

サム – ええ……。

マックス – じゃあ、あなたもあの列車に？

サム – 13号車、40番席。みなさんは？

パット – 42。

マックス – 41。

ドム – 43。

サム – じゃあ、みんな隣り合って座ってたんですね。

パット – あるいは向かい合わせ。

サム – それなら、同じ人から感染した説明がつくかも……。でも、誰から？

サムは三人を疑わしげに見回す。一同、困惑。

パット – この格好、ひどいですね。精神病院にいるみたい……。

マックス – でも、狂気って感染しませんよね……？

サム – とにかく、身体的な接触は避けましょう。

ドム – ああ、つまり、あなたはそのつもりだった……。

パット – 咳も避けましょう。するなら、口を手で覆って。

ドム – それなら、どうしてマスクを渡されなかったんだ？ 感染するなら。

パット – 私たち同士なら、もう意味がないと考えてるんでしょう。全員すでに……終わってるなら。

サム – 終わってる？

パット – ごめんなさい、感染してる、の間違いです。

マックス – それなら、咳をするとき口を手で覆う意味もないですね。

ドム – じゃあ、触れ合ってもいいってことですよね？

サム – せめて、その前に自己紹介くらいしません？（ドムに手を差し出す）サム。

少しためらってから、ドムはサムの差し出した手を握る。

ドム – ドム。

ほかの二人とも同じようにする。

パット – パット。

マックス – マックス。

四人は、ややおそろおそろ握手を交わす。突然、スピーカーから雑音がし、声が聞こえる。

声 – みなさん、こんにちは。聞こえますか？

一瞬、誰も反応しない。

サム – はい。感度良好、5段階で5です。

ドム – まあ、こっちは4人ですけどね。

声 – まずは、今回のご不便についてお詫び申し上げます。残念ながら、現在われわれ全員が直面している危機への対応として必要な措置でした。緊急に行動せざるを得ず、みなさんを拘束……いえ、この隔離施設に留め置き、外部との接触を断った理由を、十分ご説明する時間がありませんでした……。

パット – では今、その「公衆衛生上の危機」が何なのか、正確に教えてもらえますか？

声 – スピーカー越しでは少々説明しにくいのです。ただ、心配はいりません。まもなくこちらから伺います。それまでは、何一つ不自由のないよう配慮します。入口には冷蔵庫と食料の入った棚があります。廊下の先にはいくつか部屋があり、それぞれ浴室とミニバー付きです。簡素ではありますが、必要なものはそろっています……。

ドム – 必要なものは全部？

声 – テーブルサッカーまであります。

マックス – 少なくとも、これがどれくらい続くのか教えてもらえませんか？

パット – 家では夫と子どもたちが待ってるんです。まあ、特に子どもたちが……。

声 – ご安心ください。ご家族、雇用主、あるいはお客様には連絡済みです。どうぞ快適にお過ごしください。それでは、また近いうちに。

再び雑音がして、音声が途切れる。

パット – 「快適にお過ごしください」？

ドム – それで終わり……。黙って待ってるってことか……。

サム – むちゃくちゃだ……。

全員、呆然とする。

パット – 夫に電話します。せめて自分で伝えないと。（スマートフォンを取り出す）それに外のほうが情報を持ってるかも……。〈画面を操作し、表情が固まる〉圏外……。みなさんは？

ドムもスマートフォンを取り出す。

ドム – 私もです。

サム – 電波妨害してるんでしょう……。

マックス – 何のために？

困惑の間。

パット – 本当に外の世界から切り離されてる……。

ドム – どうします？

サム – どうしろっていうんです？

間。

マックス – とりあえず、食べましょう。

ドム – 何ですって？

マックス – 食べ物がどこにあるか教えてくれたでしょう。

ドム – 理由も知らされずにここへ監禁されて、外と連絡する手段も一切なくて、それなのにあなたは食べることしか考えてない……。

マックス – ほかに何かいい案があります？

ドム – ない……。

マックス – じゃあ、好きにしてください。俺は腹ぺこなんで……。

マックスが出ていく。残った三人は顔を見合わせる。

サム – まあ……私もちょっとお腹はすいてますけど……。

サムも出ていく。

ドム – どう思います？

パット – まあ……ここで餓死しても何の得にもなりませんし。

パットが出る。少しためらって、ドムもあとを追う。

暗転。

第二幕

明かりが戻る。ドムとパットは、檻の中のライオンのように行ったり来たりしている。マックスは気楽そうにそれを眺めながら、ピザを一切れ食べている。

パット – 前は四人でしたよね？

ドム – いました……。

パット – 四人目がいなくなった……。

ドム – 名前、何でしたっけ？

マックス – キム。

パット – キム？

ドム – サムだったと思います。

マックス – そうだ、サム……。

ドム – いったい何をされたんだろう？

マックス – 解放されたのかも。

パット – 解放？ だったら、どうして私たちは？

ドム – それとも……死んだとか。

パット – 死んだ？ つまり……この病気で？

ドム – わかりません。（マックスに）あなたは どう思います？

マックス – そうですね。死んだのかも。

パット – それでも食欲は落ちないんですね……。

間。

ドム – ここに来て、どれくらい経ちました？

パット – 一週間くらいじゃないですか？

マックス – ちょうど七日です。

パット – ほら、やっぱり……一週間。気が変になりそう。

ドム – 私もです。

パット – まだ拘束衣を着せられるほど狂ってはいない。でも、もう拘束はされてる。

マックス – どっちにしても、ここにいろって言われてます。

ドム – 誰に？

マックス – 当局に。つまり衛生当局。スピーカーで言ってたでしょう。聞いてなかったんですか？

パット – 匿名の声がスピーカーから流れただけです……。

ドム – 確かに。結局、何が本当かわからない。誘拐されたのかもしれない……。

マックス – 警察に？

パット – 偽警官だったのかも。みんなマスクをしてたし……。

マックス – 何のために誘拐するんです？

ドム – 家族に身代金を要求するとか？ 私には家族もいない……。あなたたちだって大富豪じゃないでしょう。

パット – 私にあるのはマンションだけ。でも五十年ローンを払い終えるまでは、実質的には銀行のものです。私を解放してローンを払い続けさせるために、銀行が身代金を出すとは思えません。

ドム – それに、誰も身代金を要求してこない。

マックス – 少なくとも、俺の知る限りは。

ドム – 誘拐犯も、私たちが金にならないと気づいて逃げたんでしょう。解放するのを忘れて……。

パット – それとも人質事件かも。人質事件って長引くことがあるでしょう。何年も続くことだって。

マックス – 人質事件？

パット – あり得るでしょう？ 何か要求があって、当局が応じなければ私たちを殺すと脅してるとか。

マックス – それなら、あなたたちはかなりまずいですよ。

ドム – 「あなたたち」？

マックス – いや、つまり……俺たち。俺たちはかなりまずい。もうずいぶん前から、当局はテロリストの脅しには屈しません。人質の命が危なくても。

間。

パット – だんだん妄想みたいになってきた……。違う。これはただの隔離。それだけ。

ドム – そう思います？

パット – そう思うことにします。でないと本当におかしくなる……。

マックス – そのほうがいい。何でも悪いほうに考えないことです。

パット – 大事なのは、誰も病気じゃないってこと……。本当に隔離なら、いつかは出してくれる。

マックス – いったい、どんな「悪」に感染したんでしょうね。

ドム – 面白いですね。今、「病気」じゃなくて「悪」と言いました。

パット – 病気以外の何に感染するっていうんです？

マックス – さあ……。何となく言っただけです。あなたは どう思います？

ドム – 何も。何も思いません。仮に何か思っても、あなたには言わない。

パットは客席のほうを向く。

パット – あの人たちも、まだいる……。

マックス – 向こうも出られないのかも。

パット – 私たちと同じように、人質にされてる？

ドム – 自由に帰れるなら、とっくに帰ってるはずですよ。

マックス – そうですね……。だって、たいして面白いことも起きてないし。

パット – リアリティ番組みたい。私たち自身が先に退屈しそう……。

キム医師が背後から現れる。サムを演じていたのと同じ俳優である。黒い立ち襟の制服を着て、テレビ司会者のような笑顔を浮かべている。

キム – みなさん、こんにちは！

三人は驚いて振り向く。

パット – 私たちと服が違う。医者なんじゃない？

ドム – 変だな……どこかで見た顔だ。

パット – 私も。前に会った気がする。

マックス – ここで何をしてるのか、説明してくれるかもしれませんよ……。

ドム – やっと！

パット – こんにちは、先生。じゃあ、ようやく解放ですか？

キム – まだ、そこまでは……。

ドム – まず、あなたが誰なのか、そして私たちがなぜここにいるのか教えてください。

キム – 私は……あなたたちの「リフォーマー」です。

パット – リフォーマー？

キム – あなたたちを、正しい形に戻すために来ました。

パット – 昔はそれを、異端審問官って呼んだんじゃないですか。

ドム – 明日は救世主とでも呼ぶのかな。

パット – でも、医者さんなんですか？

キム – 医者かどうかはともかく、博士ではあります……。キム博士です。そして、あなたたちを治すために来ました。

ドム – 治す？

キム – まあ……。正しい道へ戻す、と言いましょうか。回復への道へ……。

パット – どうやって？

キム – 再フォーマットするんです。まだ間に合うなら……。

パット – つまり、ワクチンはない。

マックス – それは実に心強い……。

パット – いい加減にしてください……。なぜ私たちをここに留めてるんです？ もう説明してもいいでしょう。

キム – あなたたちは、危険な人物と接触しました。

マックス – 危険なウイルスを持ってる人ってこと？

キム – まあ、そういうようなものです。あなたたちにも感染しているかどうか、見極めているところです……。

ドム – でも、何の治療も受けてない！

キム – 治療法はありません。

ドム – 医学的な治療法がない、という意味ですか？

パット – でも、私たちには何の症状もない！

キム – これは潜伏期間が非常に長い疾患なんです。

ドム – 本当にそのウイルスに感染してたら、私たちをどうするつもりです？

キム – その件については指示待ちです。

ドム – 傷のついたハードディスクを積んだロボットと話してるみたいだ。ウイルスに感染してるのは、むしろあなたなんじゃないですか？

パット – 確かなのは、私たちが一週間もここに閉じ込められ、家族と一切連絡できないってことです……。

ドム – 電話さえ！

パット – 電波は妨害されてる。ウイルスって、電話ではうつらないでしょう？

キム – 種類によります……。

パットは客席を指す。

パット – それに、あそこで私たちを見てる大勢の人は誰なんです？

キム – あの人たちもモルモットです。

パット – あの人たちも？ じゃあ、やっぱり私たちもモルモットなのね。

キム – あなたたちのような重度の感染者と長時間接触したあと、彼らにどんな反応が起きるか見たいのです。

ドム – 接触なんかしてないでしょう！

キム – ええ。でも、彼らにはあなたたちの声が聞こえる。姿も見える。

マックス – 実験室のハムスターになった気分だ。

パット – せめて回し車でもあれば、運動できるのに。

キム – 遊びじゃありません。信じてください。

パット – だから、そのウイルスって結局何なんです？

キム – 実は……正確にはウイルスではありません。

マックス – じゃあ何？

キム – むしろ、耳から感染するものです。あるいは目から。両方の場合もある。いわば、模倣によって広がるんです。

ドム – ああ、なるほど。これで一気にわかりやすくなった。

キム – 13号車で、誰かがあなたたちの前で不適切な、逸脱した、したがって危険な行動をとりました。

パット – どんな行動？

キム – 本当に覚えていないんですか？

パット – いいえ。

キム – 誰も？

ドム – 覚えてません。

キム – いずれわかります。あなたたちをここに隔離したのも、感染性があるかどうか確認するためです。

パット – 感染性？ ウイルスじゃないって言ったでしょう！

キム – では、こう言い換えましょう。その危険な行動を真似したくなるかどうか。つまり、ほかの人にまでうつすおそれがあるかどうか。

パット – じゃあ、私たちが……人にうつす恐れはないと確信するまで、あとどれくらいここに閉じ込めるんです？

キム – その件については指示待ちです。今は、思い出す努力をしてください。

マックス – 何を？

キム – 13号車で何を見て、何を聞いたのか。もう少し考えてみてください……。

パット – でも……。

キム – 今日はここまでです。みなさん、また近いうちに会いましょう。それまで、何か必要なものがあれば遠慮なく知らせてください。

パット – 知らせる？ どうやって？ ここに閉じ込められて、外と連絡する手段なんて何もない！ ルームサービスにすら……。

キム – ご心配なく……。求めよ、さらば与えられん。探せ、さらば見いださん……。

ドム – 門をたたけ、さらば開かれん？

キムが去る。

パット – 思い出せて……。

マックス – 何か覚えてます？

ドム – いいえ……。あなたは？

パット – 私も……。

ドム – それに、仮に思い出しても、誰も口にはしないでしょう？

マックス – どうして？

パット（客席を示して） – 私たち、聞かれてるんですよ……。

ドム – それだけは忘れようがない。

マックス – 聞かれてるとわかってれば……逸脱した行動もしにくいでしょう？

ドム – 逸脱した行動って何だ？

パット – 何から逸脱してるの？

マックス – それは……わからない……。

パット – もう、わからなくなってる。

ドム – 昔はきっと知ってたんでしょう……でも忘れた。

間。

マックス – こんな話してたら腹が減ってきた。みなさんは？

マックスが出ていく。

パット – あの人、本当に食べることしか考えてない。

ドム – あのバカ、私たちを監視するために送り込まれたんじゃないかって気がする。

パット – もう監視されてるでしょう？

ドム – じゃあ、内側から監視するため。

パット – スパイ？ それなら、私たちの誰だってあり得る。

ドム – そう……私だってね。

パット – あなたは向こう側の人間じゃないと思います。

ドム – あなたこそスパイかもしれない。私にしゃべらせようとしてる。

パット – だとしたら、あまり成功してませんね。何もしゃべらないもの。

ドム – 用心してるだけです……。

パット – じゃあ、私が話します。

ドム – どうぞ。

パット – 何も覚えてないって言いましたけど……正確には、そうじゃないんです。

ドム – 本当に？

パット – 一つ、覚えてます。

ドム – どうぞ……。 (客席を示して) 私たち全員、聞いてますよ……。

パット – あの列車で、私たちの近くに座っていた一組の男女を覚えてます。

ドム – そう……？

パット – 男のほうが、女のほうに話をしたんです。

ドム – 話？

パット – 狂人の話。

ドム – 聞いてみたいですね。

パット - ある狂人が鏡を拾います。のぞき込んで自分の顔を見て、「このバカ、どこかで見た顔だな……」と言う。すると別の狂人が鏡を取り上げて、自分ものぞき込み、「当たり前だろ。そのバカは俺だ！」

ドム - それが「狂人の話」だと？

パット - だって、こんなわけのわからない話をするなんて、狂人くらいでしょう。そう教えられてきたじゃないですか？

ドム - そうですね……。

パット - それに、この話、私が今話す前から知ってましたよね……。

ドム - さあ。

パット - 私と同じように、あの車両で聞いたんです。

ドム - そうだとしましょう。それで？

パット - 女の顔が……歪んだみたいになったんです。足の先から頭まで、けいれんするように震えて。口を開けたら、途切れ途切れの叫び声みたいなものが出て……。

ドム - 叫び声？ どんな？

パット - ハ、ハ、ハ！

ドム - ハ、ハ、ハ？

パット - ハ、ハ、ハ！

パットは突然、ヒステリックに笑い出す。

ドム - もう少し静かに……。それから？

パット - 苦しそうには見えませんでした。男が彼女を見て、それから男も同じ症状になった。

ドム - じゃあ、やっぱり感染するんだ。それで？

パット - 警察が来て、二人とも連れて行きました。

ドム - なるほど……。

パット - もちろん、わかるでしょう。あなたもそこにいたんだから。

ドム - 覚えてません……。

パット - 私はスパイじゃありません。私には話して大丈夫。

間。ドムはパットを舞台奥へ連れていき、客席から離れる。

ドム - あれは「笑い」っていうんです。

パット – 何ですって？

ドム – あなたが今、症状を説明した感染症。あれは「笑い」です。

パット – 笑い？ 何それ？

ドム – 衛生当局が撲滅したはずの病気です。まあ、完全じゃなかったみたいだけど。見ての通り。

パット – どんな病気なんです？

ドム – とても古い病気です。人類と同じくらい古い。症状そのものは比較的軽いけど、秩序を乱す行動を引き起こす。あいつらの言い方なら「逸脱行動」……。

パット – でも今、私が同じ話をしたのに、あなたは笑わなかった。

ドム – 二度目はたいてい面白くない。それに、私たちは笑う習慣を失った。何が面白いのかも、もうわからない。

パット – おかしい？

ドム – おかしい。つまり「可笑しい」。笑いを誘うって意味です。私たちはもう、笑い方を知らない。

パット – あなたは？ ときどき……笑うことがある？

ドム – 隠れて、って意味ですか？ だって、公に笑ったら……笑ってるところを見つかった人がどうなるか、見たでしょう。

パット – それで？

ドムは彼女に近づき、声を落とす。

ドム – 私は、あるグループに入ってます。

パット – テロ組織？

ドム – そう呼びたければ。秘密の集会を開いて、面白い話をして、笑う。まあ、笑おうとするんです……。

パット – 狂人の話みたいな？

ドム – 当局をからかうには狂人でなきゃいけないんですか？ 最高指導者をからかうのも……。

パット – でも当局を批判するのは禁止でしょう？ 最高指導者を侮辱するなんて、冒涇です。

ドム – 昔は、冒涇だって許されてた。

パット – どうしてそんなことを知ってるんです？

ドム – 本が見つかったんです。

パット – 本？

ドム – 新聞も。

パット – それは何？

ドム – タブレットみたいなものです。ただし、文字が黒いインクで紙に印刷されてる。

パット – 商品のパッケージみたいに？

ドム – しかもネットワークで配信されないから、管理できない。

パット – 当然、禁止されてるんでしょう。

ドム – 昔は違った……。別の時代です。

パット – 覚えてません。

ドム – 誰も覚えていない時代です。当局がそうなるようにした。とりわけ、本を全部焼いて。

パット – 笑い……。

ドム – 昔は、笑いこそ人間の特徴だと言われていたそうです。ミツバチやアリやシロアリみたいな社会性動物と、人間を分けるもの……。

パット – でも知性は残ってる。

ドム – それも、いつまで残るか……。教師は訓練官になった。政治家はリフォーマーになった。IT技術者は情報処理員になって、もう情報処理機とほとんど変わらない……。

マックスが戻ってくる。二人は会話をやめ、何でもないような顔をする。

パット – しっかり食べました？

ドム – おいしかった？

マックス – 最高でした。

パット – 今日は何？

マックス – ピザ。

ドム – また？

パット – いつまでここに閉じ込められて、ピザばかり食べさせられるのかしら。

マックス – 俺はピザ好きですけどね。

ドム – 逃げ出すっていうのは？

マックス – 脱走？ でも禁止でしょう？

ドム – もちろん……。冗談ですよ。

マックス – 禁止に決まっています。それに、外の人たちにうつすかもしれない。

ドム – とくに観客にね。今のところ、あまり笑ってるようには見えないけど……。

マックス – それに、どうせすぐ見つかりますよ……。

ドム – じゃあ……どうする？

パット – ピザ、まだ残ってる？

マックス – 冷凍庫に山ほど。電子レンジで温めればいい。

ドム – 一緒に行きます。

ドムとパットが出ていく。キムが戻ってくる。

キム – それで？ 何か聞き出せました？

マックス – 何も……。自分が本当に情報提供者に向いてるのか、だんだん自信がなくなってきました……。

キム – 私もそう思い始めてます……。まあいい。でも、何か意見くらいあるでしょう？

マックス – 何が？

キム – あなたはどう思ってるんです？

マックス – 何も。考えすぎるなって、いつも言ってたでしょう、ボス。考えるのは危険だって……。

キム – どのみち、あの二人についてはもう記録があります。

マックス – 俺についても記録が？

キム – もちろん！ 報奨金をもらうために、自分で自分を警察に密告して、その記録まで自分で作ったでしょう。忘れたんですか？

マックス – いや、覚えてます……。そのおかげで十年間、あなたの言う「正しい道に戻す」ための施設に入れられました。

キム – みんながあなたみたいなら、こちらの苦勞はずっと減りますよ。本当に。

マックス – あの人たち、本当に危険なんですか、ボス？

キム – まだ疑ってるんですか？

マックス – いえ、もちろん……。

キム – 何一つ聞き出せないなら、自分自身について新しい報告書を書きなさい。逸脱した考えを全部、一覧にして。明日の朝、私の机に。

マックス – はい、ボス。

マックスは周囲を見回し、客席のほうにも目をやる。

キム – 今度は何を考えてるんです？

マックス – 何も。ほんとです。

キム – 何か考えてる顔でしょう！ さあ？

マックス – ただ……ここって何なんだろうって。

キム – 使われなくなった劇場です。

マックス – 劇場？

キム – 昔、人々が集まって一緒に笑っていた場所です。

マックス – 笑うために？

キム – 当時は合法でした。何をからかってもよかった。当局さえも。

マックス – 最高指導者まで？

キム – 自分自身さえも。

マックス – そんな時代が完全に終わって、本当によかった。

キム – ええ……。まさか、まだ何か考えてるんじゃないでしょうね……。

マックス – 報告書を書きに行きます。

マックスが出る。キムは客席のほうへ向かう。

キム – みなさんは大丈夫ですか？ 危険な症状は？ 急に笑い出したりしてませんか？ よろしい。おとなしくしていれば、もう少ししたら帰してあげますよ……。

キムが出る。ドムとパットが戻ってくる。

ドム – あいつだと思います？

パット – 誰が？

ドム – サムですよ！ スパイだと思います？

パット – じゃあ、もう私がスパイだとは思ってないんですね。

ドム – ええ。

間。

パット – あの二人のこと、あなたはちゃんと覚えてる。

ドム – どの二人？

パット – 男が女に話をして、二人とも笑った、あの二人。

ドム – どうして私が覚えてると思うんです？

パット – だって、あの二人って、私たちだったから。

ドム – そうかもしれない。（間）それまで一度も笑ったことがなかった？

パット – ええ。自分に何が起きたのかわからなかった。なんていうか……何も制御できなくなって……少し恥ずかしかった。

ドム – わかります。初めてはいつもそうです。

パット – あなたは？ 前に、ほかの女性と笑ったことがある？

ドム – あります。ほかの女性とも。男とも。何人か一緒に、ということも。

パット – 何人も一緒に……。

ドム – 楽しかった？

パット – 私……わからない……。

ドム – 楽しかったんでしょう。

パット – ええ……。

ドム – そのうち、やめられなくなりますよ。

パット – それが怖いんです。それで私たちはここに閉じ込められたんでしょう？

ドム – そう……。向かいにいた残りの二人は、たぶん警察だった。

パット – 私たちをここへ連れて来たのは、あの二人です。マスクをしてたけど、声でわかった。

ドム – じゃあ、知ってたんですね。

パット – ええ。でも、二人が笑っただけで、どうしてそこまで怖がるの？

ドム – 笑いには破壊力がある。あいつらはそれを知ってる。

パット – 破壊力？ 健康に悪いってこと？

ドム – 健康にはむしろいい。危険なのは、あいつらにとってです。

パット – どうして？

ドム – 何でも笑えるようになると、人はずっとだまされにくくなる。それに、ずっと従順でなくなる。笑いは体制を揺さぶるんです……。

パット – それで、私たちをどうするつもり？

ドム – わかりません。私たちが怖いんですよ。

パット – 怖い？

ドム – この笑いが感染することを恐れてる。そして、この流行が体制そのものを飲み込み、あいつらまで一緒に消し去ることを……。

パット – 私たちを殺すと思います？

ドム – もう考えてるでしょう。でも、全員を殺すことはできない……。

パット – じゃあ、どうする？

ドム – もう一つ話をしましょうか？

パット – もう一つ、冗談？

ドム – どうせ死ぬなら、笑い死にしたほうがいい……。

パット – 念のため言っておきますけど、私、結婚してますから。

ドム – 安心してください。笑うくらいなら浮気とは言えません。

パット – 聞きましょう……。

ドム – では、こんな話です……。

パット – ここじゃやめましょう。聞かれてる気がする……。

ドム – そうですね……。私の部屋へ行きましょうか……。

二人が出ていく。キムとマックスが戻ってくる。

マックス – はい、ボス。報告書です。

キム – ずいぶん薄いですね……。本当に書き忘れはない？

マックス – 絶対にありません、ボス。

キム – あの二人はどこへ？ まさか逃げたんじゃ……。

マックス – 部屋にいるんでしょう。

ドムとパットの大きな笑い声が聞こえる。

キム – これで、はっきりしましたね。

マックス – ええ……。完全にウイルスに感染してます。

二人は再び聞こえてくる笑い声に耳を傾ける。少し気まずく、同時に心を乱されてもいる。

キム – あなたは笑ったことがあります？

マックス – ありません。あなたは？

キム – 痛そうじゃないですか？

マックス – 知りませんよ。一度も笑ったことないって言ってるでしょう。また俺を試してるんですか？

舞台裏から、また笑い声が響く。

キム – 今度こそ、もう選択肢はありません。当局に報告しないと……。

暗転。

第三幕

キムは立っている。相変わらず黒い立ち襟の制服姿。ドム、パット、マックスは座っている。ドムとパットは青・ピンク・緑などの患者用ガウンのままだが、マックスは今は白い医療スタッフ風の上着を着ている。

キム – みなさん。まずは、こちらの招集に応じてくださいありがとうございます。

パット – あまり選択肢はありませんけど……。

ドム – 私たちは囚人だ！

キムは咳払いし、何事もなかったように続ける。

キム – では。ここへ集まっていたいたのは、集団療法を行うためです。

パット – 取り調べ、の間違いでしょう……。

キム – ここへ来てから、あなたたちのうち二人が笑いの発作を起こしたことはわかっています。つまり、どちらか一人は隔離される前から感染していた。そしてもう一人は、その人からうつされた。

ドム – そこまでわかってるなら、この茶番みたいな捜査は何のためです？

キム – 罪を犯した者には、自分で名乗り出てもらいます。それも治療の一部です……。

マックス – 笑う？ 俺たちが？ そもそも、その言葉の意味すら知りませんよ。そうでしょう、みなさん？

パット – もういい。やめて。あなたがスパイだって、みんなわかってます。

マックス – でも、俺は……。

ドム – しかも、相当ひどいスパイだ。

マックス – わかった、潜入員ではあるかもしれない。でもスパイじゃない。スパイっていうのは「悪い側」にいるやつでしょう。俺たちは「正しい側」ですよ、ボス？

キム – この人はスパイではありません。情報提供者です。

ドム – じゃあ、あなたはいったい何なんですか？

キム – あなたたちのリフォーマーです。

ドム – 改革者？

キム – あなたたちを再フォーマットするために来ています。

ドム – 「改革者」って、本来そういう意味じゃない。

キム – 辞書を引けばわかります！

ドム – その辞書を全部書き換えたのは、あなたたちでしょう。でも私は古い百科事典を一冊見つけた。昔、この言葉が何を意味していたか知ってます。

キム – 今では、あらゆる言葉の意味を定義するのは当局の役目です。判断基準はただ一つ、国家の利益です。

ドム – 聖書まで全部書き換えた！ 神を最高指導者に置き換えた！ 過去の痕跡を消すため、本を全部焼いた！

キム – どうやら全部ではなかったようですね。あなたは何冊か読んだらしい。

ドム – 今、読めるものは全部、あなたたちが完全に管理しているネットワーク経由で、画面に表示されるものだけです。

パット – つまり私たちを再フォーマットする……。ハードディスクを消去して、OSを入れ直すってこと？

ドム – ついでにアンチウイルスも入れるんでしょうね……。

キム – 笑いには非常に強い依存性があります。一度笑った者は、また笑いたいという誘惑から逃れられない。

パット – つまり、笑いはドラッグだっていうんですか？

ドム – 少なくとも、ハードドラッグじゃないでしょうね。

キム – 笑いへの依存は、アルコール依存と同じです。完全には治りません。笑わずにすることはできても、誘惑は常に残る。

マックス – 一度アル中になれば、一生アル中。

キム – あなたはよく知ってますね。十年間も依存症治療施設に送られた。隠れて酒を飲み、しかも自分で自分を警察に密告した。

マックス – 今はもう飲んでません。

ドム – その代わり、よく食うけど……。

マックス – じゃあ、この療法って、「匿名アルコール依存者の会」みたいなもの？

キム – そうです……。「匿名笑い依存者の会」。

パット – 隠れて笑ってる人を見つけ出すための。

キム – その通り。

ドム – どうやって見つけるんです？

キム – 話を一つします。面白い話、らしいです。誰が笑うか見ればいい。

パット – なるほど。いわば検査ですね。

ドム – 不思議ですね。あなたがどんな話をしても、誰かを笑わせられるとは思えない。

キム – なぜ？

ドム – 笑うなら、お互いその気で、気心の知れた相手とでないと。

パット – 今の状況って要するに、「最初に笑った人は再教育キャンプ送り」って言われてるようなものです。

ドム – あるいは、もっと悪ければ処刑。

キム – どうしてわかったんです？

パット – もう笑い死にしそう……。

キム – とにかく、話しますよ。

マックス – どうぞ、ボス。

キム – ある狂人が鏡を拾います。のぞき込んで自分の顔を見て、「このバカ、どこかで見た顔だな」と言う。すると別の狂人が鏡を取り上げ、自分ものぞき込み、「当たり前だろ。俺だよ」

マックス – くだらなすぎる。

キム – そこが面白いんでしょう？ たぶん。

ドム – まあ、話し方にもよりますね。

パット – それより、誰が話すか。

キム – そうですか？

パット – 笑ったら処刑されるとわかってたら、笑いにくいでしょう。

キム – そう？

パット – 当たり前です。

キム – なるほど……。じゃあ、こうしましょう……。先に笑った人は負け。罰ゲーム付き！ 誰か私とやります？

ほかの三人は黙ったまま。

マックス – 俺ならやりますよ、ボス。

キム – よし……。笑ったら負けです……。

二人はそれぞれ水の入ったコップを取り、口に水を含む。そのまま互いのあごをつかみ、非常に真剣な顔で見つめ合い、長いあいだ身動きもせず沈黙する。ほかの者たちは困惑して見ている。やがてマックスが少しずつ笑いそうになり、ついに吹き出す。同時に、口に含んでいた水を相手の顔に噴き出してしまう。笑いは伝染し、ほかの全員も一斉に笑い出す。

キム – これで、全員感染ですね……。

ドム – もうこっちの仲間だ。みんなと同じように笑ったんだから……。

キム（マックスに） – では、あなたは今度こそ本当に隔離ですね。

マックスは真顔に戻ろうとする。

マックス – 命令に従います、ボス。

だがマックスはどうしても笑い続けてしまう。

キム – 何がそんなにおかしいんです？

マックス – 何もおかしくありません！ いや、あるけど……。

ドム – ほら、あなたも面白くなれるじゃないですか。なろうとしたときじゃなくて、なりたくないときに……。

全員、やや取りつかれたように笑い続ける。キムはその笑いをひどく不快に感じ、ほとんど怯えている。

キム – 笑うのをやめなさい！ 命令です！

しかし三人は笑いの発作に飲み込まれ、止められない。キムは両耳をふさぎ、慌てて出ていく。ドム、パット、マックスは少しずつ笑いを収める。

ドム – どうです？ どんな感じ？

マックス – 笑うって？ わからない……。痛いものだと思ってました。実際は、むしろ気持ちいい。

パット – とても気持ちいい……。

マックス – とにかく、すっきりする。

ドム – 昔は、人前で笑ってもよかったなんて……。

パット – どうして、こんなことになったんでしょう？

ドム – 始まりはずっと昔です。でも少しずつ進んだ。まず、特定のことを笑いの種にするのが禁止された。最初は宗教から……。

マックス – それから当局、もちろん。

ドム – そして最高指導者を新しい神に仕立て、あらゆる批判を冒涇にした。

マックス – 酒も禁止された。酔うと笑いやすくなるから。

ドム – 当局は「まだ笑ってよい話題」の一覧を作った。年を追うごとに、その一覧はどんどん短くなった。

マックス – 最後には、笑うこと自体を禁止するのが一番簡単だと決めた。

ドム – そうやって少しずつ、「何でも笑いの種にしていわけじゃない」から、「何ひとつ笑ってはいけない」になっていった……。

マックス – 最後には、自分自身を笑うことさえ許されなくなった……。

ドム – 貧しい人でさえ、自分の不幸を笑い飛ばす権利を失った。

パット – でも、どうやってそんな禁止を守らせたんです？

ドム – 当局は笑いを精神疾患として扱った。笑っているところを見つけた人は、すぐ施設に収容された。

マックス – もちろん、笑いたくなるものは全部取り除いた。

ドム – 新聞は禁止、劇場は閉鎖、自己検閲が社会全体に広がった……。

マックス – 道化師も、コメディアンも、俳優も、危険なテロリスト扱いされた。

ドム – 笑いは、昔のハンセン病みたいに扱われた。笑い声を聞かされただけで、家に閉じ込められ、入口を壁で塞がれた人までいた。

マックス – 国民全員にマスクも強制した。

ドム – ウイルスから身を守るという名目で。でも本当の目的は、誰の顔にも笑顔ひとつ見えないようにすることだった。マスクは口輪になった。

マックス – 昔の一部の宗教みたいに。

ドム – 当局そのものが唯一の宗教になる前の話です。

マックス – そうして少しずつ、誰の笑い声も聞こえなくなった。

ドム – 笑うことを禁じれば、当然、批判することも抗議することも禁じられる。

マックス – 労働争議もなくなり、政治的な議論もなくなった。そして選挙も消えた。

ドム – 世俗的な独裁でも、宗教的な独裁でも、昔からよくあったことです。

マックス – 当局は、この「病気」は完全に根絶したと思っていた。でも最近、散発的に症例が出始めた。あなたたちは、その一部です。

パット – 私たちをどうするつもり？ 殺すの？

マックス – あなたたちは筋金入りの「笑いの常習犯」、つまり治療不能と見なされてる。だから排除する前に、実験に使うつもりだった。

パット – 実験？

マックス – あなたたちと接触した観客がどう反応するか。笑いがどう広がるか。健全な人々に、どんな被害を及ぼすかを観察するためです。

パットは客席を見る。

パット – じゃあ、私たちはあの人たちを笑わせるはずだった？

ドム – 知ってるのは、くだらない冗談が少しだけ……。

パット – 笑うことも、笑わせることも、もう一度覚え直さないと。

間。

マックス – でも、最高指導者が俺たちを見捨てたら、どうなるんです？

ドム – 世界の終わりじゃない。むしろ再出発です。訓練官は教師に戻る。リフォーマーは政治家に……。

マックス – じゃあ、俺みたいな情報提供者は？ 俺、何もできない！ どうすればいいんです？

ドム – 何もできないなら、俳優にでもなればいい。

暗転。

第四幕

パットは不安そうに行ったり来たりしている。やがて客席のほうへ進み出る。

パット – 心配しないで。あなたたちも、もうすぐ解放されると思います。たぶん……。

ドムが入ってくる。

ドム – 何か新しいことは？

パット – 何も。外が少し騒がしい気がする。でも音がかなり遮られてる。

ドム – 劇場って、たいてい防音がしっかりしてますからね。

パット – あのスパイはどこ？

ドム – 残りのピザを片づけてます……。

パット – まだここに閉じ込められたまま。外の世界と完全に切り離されて。もう何日も外の情報がない。

ドム – 冷凍庫が空になったら、今度は餓死ですね。笑い死にしようと思ってたのに……。

パット – 生きてここから出られると思います？

ドム – そもそも、ここに隔離される前から、私たちは半分死んでたんじゃないですか…
…？

パット – そうかもしれない。本当に長いこと患ってた病気は、むしろ「陰気病」のほうだった。

ドム – 笑いは、その解毒剤なのかもしれない。

マックスが戻ってくる。

マックス – 外で変な音がしません？

ドム – いや……。

三人とも耳を澄ます。

パット – ああ、そうかも……。ずいぶん遠くから聞こえる……。

ドム – 爆発音みたいじゃないですか……？

マックス – 爆発？ 笑いの爆発なら、そうかも。

キムが戻ってくる。顔は青ざめ、服装も乱れている。手には「笑うな」の標識。赤い丸で囲んだ紙に、大笑いする顔の絵文字があり、その上に赤い斜線が引かれている。

マックス – 颜色が悪いですよ、ボス。何があったんです？

キム – 状況が変わりました……。

マックス – あまりいい方向には見えませんね。

キム – 誰にとってかによります。

マックス – 流行が広がってる？

キム – 残念ながら、ついに世界規模のパンデミックになりました。完全に制御不能の笑いの発作です。世界中が集団的な笑いの渦に巻き込まれ、街のあちこちで笑いの爆発が報告されています。

マックス – そんなに深刻なんですか？

キム – 街角という街角で笑いが炸裂しています。警察はもう完全にお手上げです。もっと悪いことに、警察官の多くがすでに笑い死にしている！ 顎が外れるほど笑い、肋骨が折れそうなほど笑い、腹を抱え、のけぞり、狂ったように笑い転げ、床を転がり、笑いすぎて漏らし、しまいには涙まで流して笑ってるんです！

マックス – え、笑いすぎて泣くこともあるんですか？

キム – 「狂人が増えるほど、笑いも増える」っていう昔の言い回しを知ってます？

マックス – いいえ。

キム – なら教えてあげます。今や世界中が狂ってます！

ドム – つまり、革命が始まった……。

キム – 体制そのものが崩壊しています。当局は総辞職し、最高指導者は国外へ逃亡しました。

マックス – 最高指導者が？ どこへ？

キム – バチカンに政治亡命を申請しました。あそこなら少なくとも、笑い死にする心配はありません。

パット – それで、私たちはどうなるんです？

キム – もう隔離しておく意味はありません。自由です。

ドム – やっと……。見てみたいな。街なかで笑う人。電車やバスで笑う人。そしてそのうち、映画館や劇場で笑う人まで。

キム – 私にはまったく笑えません。

パット – ほら！一緒に腹の底から笑いましょうよ！

ドム – この話、知ってます？ 世界中に笑うのを禁止しようとした狂人の話……。

マックス – そして最後には、自分が笑いすぎて息ができなくなる。

ほかの者たちは声を上げて笑い出す。キムもつられるように神経質な笑いを漏らし始め、それはやがて激しいけいれんに変わる。キムはその場に倒れる。パットが身をかがめる。

パット – 死んでる！ 本当に笑い死にってあるんですか？

マックス – 最近、確認された現象です。当局の幹部は、轟くような笑い声を浴びると突然死する。

ドム – だから、何としても流行を止めたかったんだ。

パット（マックスに） – でも、あなたは死んでない。

マックス – もう当局を信じてなかったからでしょう……。

ドム – ある意味、もうワクチン接種済みだったんだ。私たちと同じ！

パット – じゃあ、本当に自由？

ドム – 何でも笑える自由を取り戻した！

パット – 私たち、鳥インフルエンザか「チンタオ・ウイルス」か何かで隔離されたと思っていたのに。

マックス – これから、どうします？

ドム – もう一度、笑い方を覚える。もう一度、生き方を覚える。

パット – ちょっと怖い……。

ドム – 当然です。解放されたばかりの奴隷は、最初、自分の自由をどう使えばいいかわからない。

マックス – じゃあ、また酒を飲んでもいい？

パット – もちろん！ でも、もう必要なくなるかもしれませんよ。

マックス – すばらしい！ でも本当に、くらくらしますね。

ドム – そう……。私たちは、亡くなった手品師の鳩みたいなものです。

マックス – どういう意味です？

ドム – 私たちは手品から生まれた。でも、無から私たちを出現させた手品師はもういない。自分たちを生み出した仕掛けを何も知らず、この翼で何をすればいいのかも、よくわからない……。

パット – 素敵なことを言いますね。

ドム – 詩です。

パット – 詩？

ドム – それも、あいつらが禁止してたものの一つ。

パット – ほかに、そういうものがあるんですか？

ドム – たくさん！ たとえばオーガズム。あなた、それも知らない？

パット – 言ったでしょう。私、結婚してます……。

ドム – あとで二人きりのときに教えますよ……。愛にとってのオーガズムは、知性にとっての笑いみたいなもの。あるいは、風邪にとってのくしゃみ。治してくれるわけじゃないけど、その瞬間はすっきりする。

キムが意識を取り戻す。

パット – あら。どうやら完全には死んでなかったみたい。

マックス – この人も、もう当局をあまり信じてなかったのかも。

キム – 私に……何が？

パット – 笑いの発作です。大丈夫。もう心配いりません。

マックス – そうだ、観客！ 忘れてた。

ドム – 今なら、あの人たちを笑わせても罰せられない……。

マックス – いいんですよ、ボス？

キム – ここは劇場ですからね。

ドム – じゃあ、新しい面白い話を作らないと。

キム – ええ。だって、鏡をのぞく狂人の話、私は今でもどこが面白いのかわかりません……。

ドム – あれは本当は、象徴的な話なんです。

キム – 象徴的？ それ、また何なんです？

ドム – ユーモアは鏡です。俳優が観客に差し出す鏡。その鏡を見て、観客は自分自身の欠点を笑える。

パット – そして、その鏡には誰もが自分の姿を見つけられる。

ドム – 誰もが。狂人だけは別です。自分に返ってくる歪んだ顔を見たくなくて、鏡そのものを壊そうとするから。

マックス – じゃあ、笑いましょう！

ドム – それが私たちの自由です。前世紀のあるコメディアンを借りれば、「自由は、使わなければすり減る」。

パット – 一緒に笑いましょう。でも、何でも笑いの種にしましょう……。

マックス – 今日、何でも笑えなくなれば、明日は何ひとつ笑えなくなるから。

マックスは「笑うな」の標識をつかみ、キムの頭にかぶせる。全員が声高らかに笑い出す。録音した笑い声を重ねて増幅してもよい。

暗転。

終

著者について

ジャン＝ピエール・マルティネス

1955 年、フランスのオーヴェル＝シュル＝オワーズ生まれ。

若い頃にはいくつかのロックバンドでドラマーとして活動した後、広告分野の記号論研究者として仕事を始める。その後、テレビドラマの脚本家として活動し、やがて演劇の世界へと進み、戯曲を書くようになる。

これまでに数多くのテレビ脚本と 100 本を超える戯曲を執筆。その作品はフランスをはじめ世界各国で上演され、多くの言語に翻訳されている。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品は、現代社会、人間関係、権力、偶然、アイデンティティといったテーマを、ユーモア、風刺、不条理、時にはブラックユーモアを交えながら描いている。

戯曲の多くは、著者の公式サイトで無料で読むことができ、PDF でダウンロードすることもできる。

ジャン＝ピエール・マルティネスの日本語版戯曲：

<https://jeanpierremartinez.net/en/%e3%82%b8%e3%83%a3%e3%83%b3%ef%bc%9d%e3%83%94%e3%82%a8%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%bb%e3%83%9e%e3%83%ab%e3%83%86%e3%82%a3%e3%83%8d%e3%82%b9%e3%81%ae%e6%88%af%e6%9b%b2-%e7%84%a1%e6%96%99%e3%83%80/>

著作権および上演について

著者：ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

本作品は著作権によって保護されています。

この戯曲のテキストは、個人的な読書を目的として無料で読むことができ、ダウンロードすることもできます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。

上演には、所定の著作権使用料が発生する場合があります。

著者の事前の許可なく、本作品の全部または一部を上演、翻案、複製、公開することはできません。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

お問い合わせ：

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲：

<https://jeanpierremartinez.net/en/%e3%82%b8%e3%83%a3%e3%83%b3%ef%bc%9d%e3%83%94%e3%82%a8%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%bb%e3%83%9e%e3%83%ab%e3%83%86%e3%82%a3%e3%83%8d%e3%82%b9%e3%81%ae%e6%88%af%e6%9b%b2-%e7%84%a1%e6%96%99%e3%83%80/>